



Target is 齋藤 みゆき (34歳)

妻を愛するが故、旦那が企てた計画。

愛しているよ、みゆき。
「いやです…旦那以外のモノなんて、口にしたくない…」
競水人妻
寝取られ
ハンティング

「奥さん、測定の結果、
ケツがデカ過ぎるから
罰ゲームだな。」

私は競泳水着フェチであり、匂いフェチでもある。

妻のみゆきはとても優しく、私のそのフェチを受け入れてくれている。少し恥ずかしそうに、少し嫌がる素振りも見せながら、それでも応えてくれる。私はそんな妻がとても愛おしく思える。

休みの日には家で競泳水着を着てもらい、その上に服を着て、外出する。そして、人気のない撮影場所と一緒に探し歩く。

そうすることで、ややぼつちやいな妻は汗をかき、水着に汗を染み込ませるのだ。水着も彼女の体には小さいMサイズを無理矢理に着せる。

「キツいからLにして」とお願いされるが、私はMを買う。

キツイ競泳水着を着るだけで、アソコに染みを作っているのを知っているから。興奮して汗ばみ、アソコを濡らし、イヤらしい匂いをプンプンさせるみゆき。そんな妻が、愛おしくてたまらない。

人間とは欲深い生き物で、これだけ妻が私の趣味を受け入れてくれているにも関わらず、善からぬことを考えてしまう。

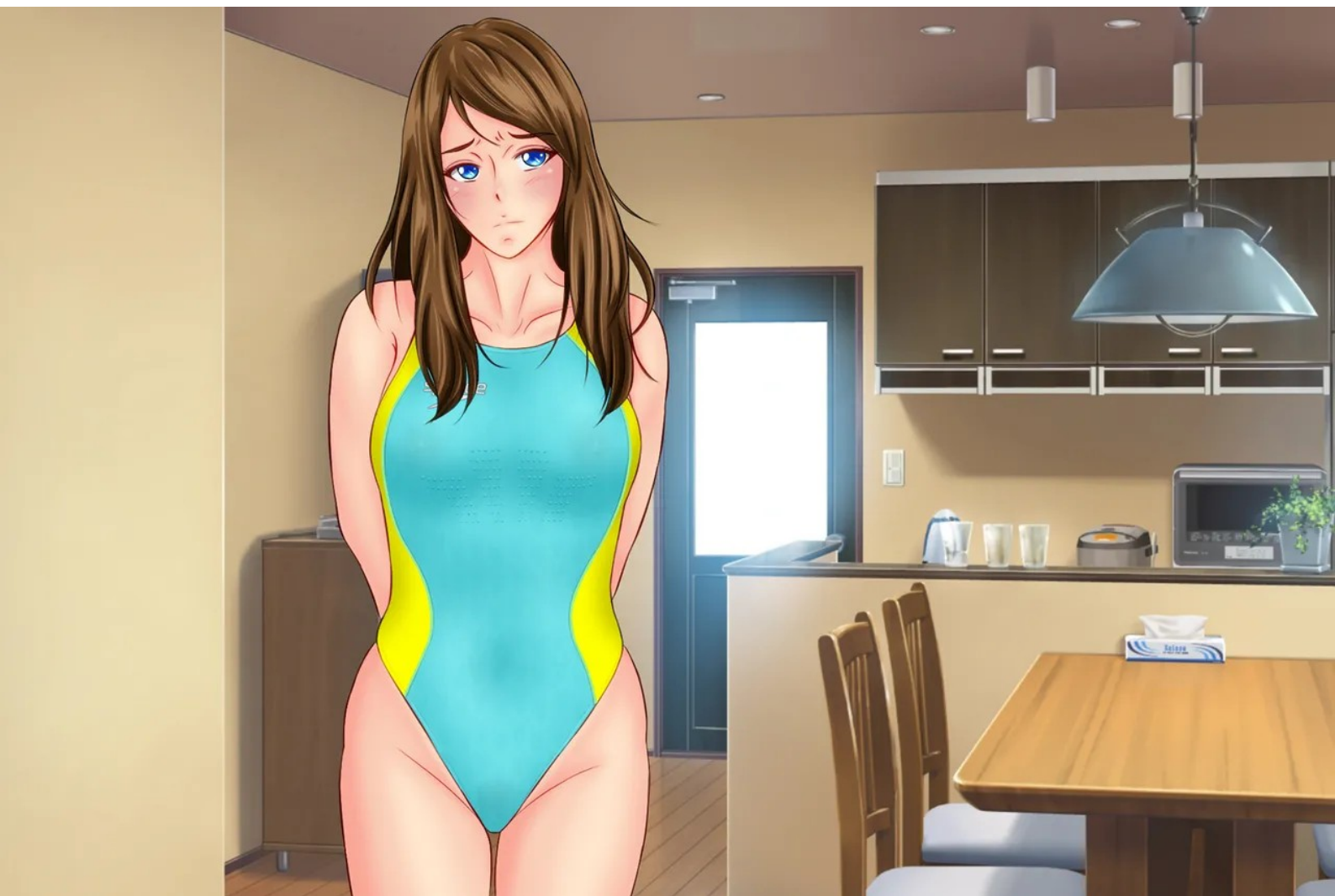
撮影をしていると、つい思ってしまうのだ。

「みゆきが他人に犯されている所が見たい」と。

いくら妻がお人好しでも、さすがにこれだけは首を縦に振らないだろう。女には理解できない感情というものが男にはあり、この『寝取られ願望』はその中の一つだ。だから、口が裂けても妻には言えない。

でも、だからこそこの欲望は、どんどん大きくなっていく。

競水人妻寝取られハンティング



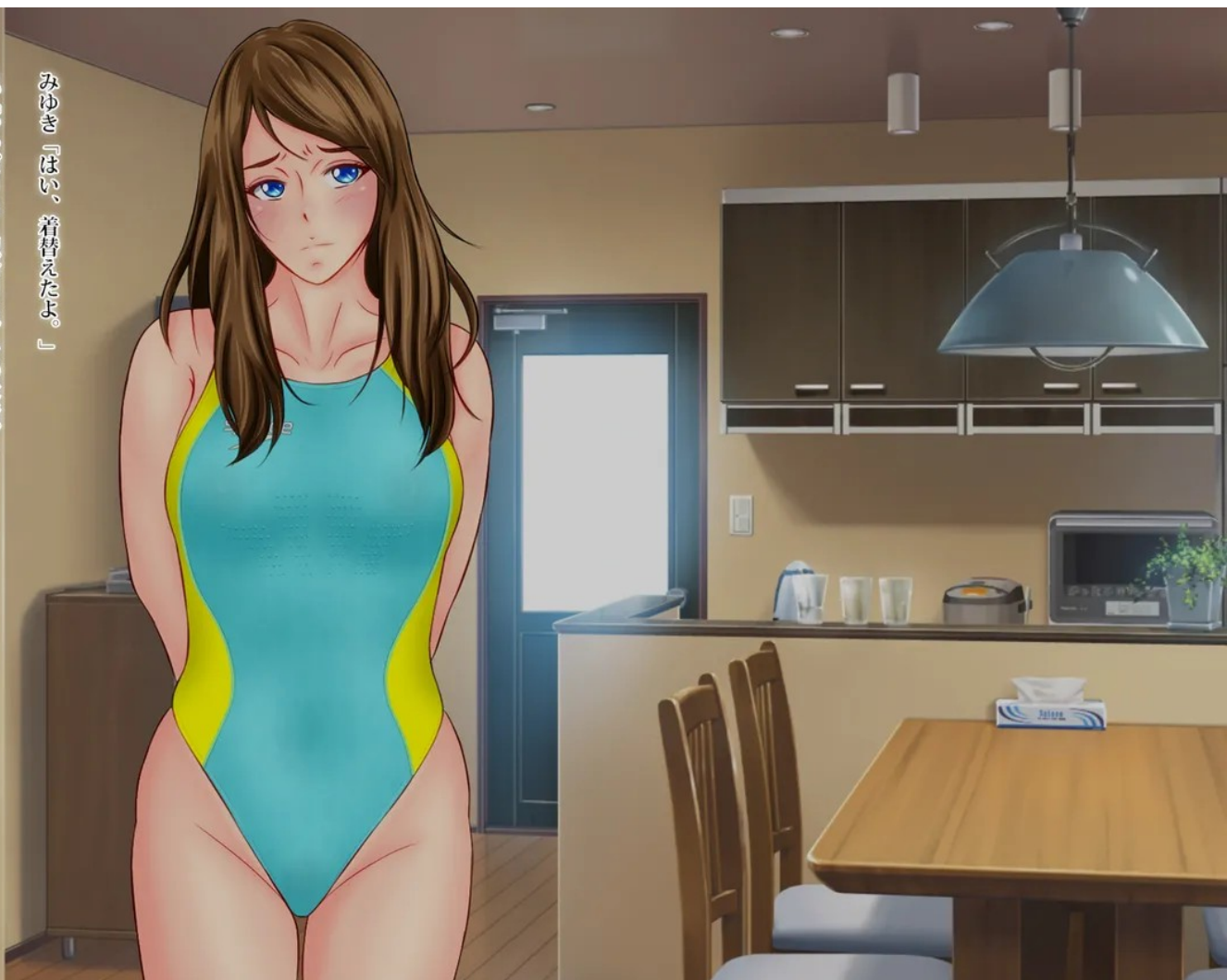
みゆき「はい、着替えたよ。」

私「やっぱりよく似合うよ、その水着。」

みゆき「キツイから嫌だって言ってるのに…カットも高いし。」

私「その水着を着るといつもより濡れてるのは誰だ？」

みゆき「も、もう…知らない！」



妻はドMだと思う。
だから錯覚してしまうんだ。
寝取られ願望を告げても、みゆきなら理解してくれるんじゃないかと。



みゆき「今日はどうするの？」

私「今日は電車で行こうか。ちょっと気になっている場所があるんだよ。」

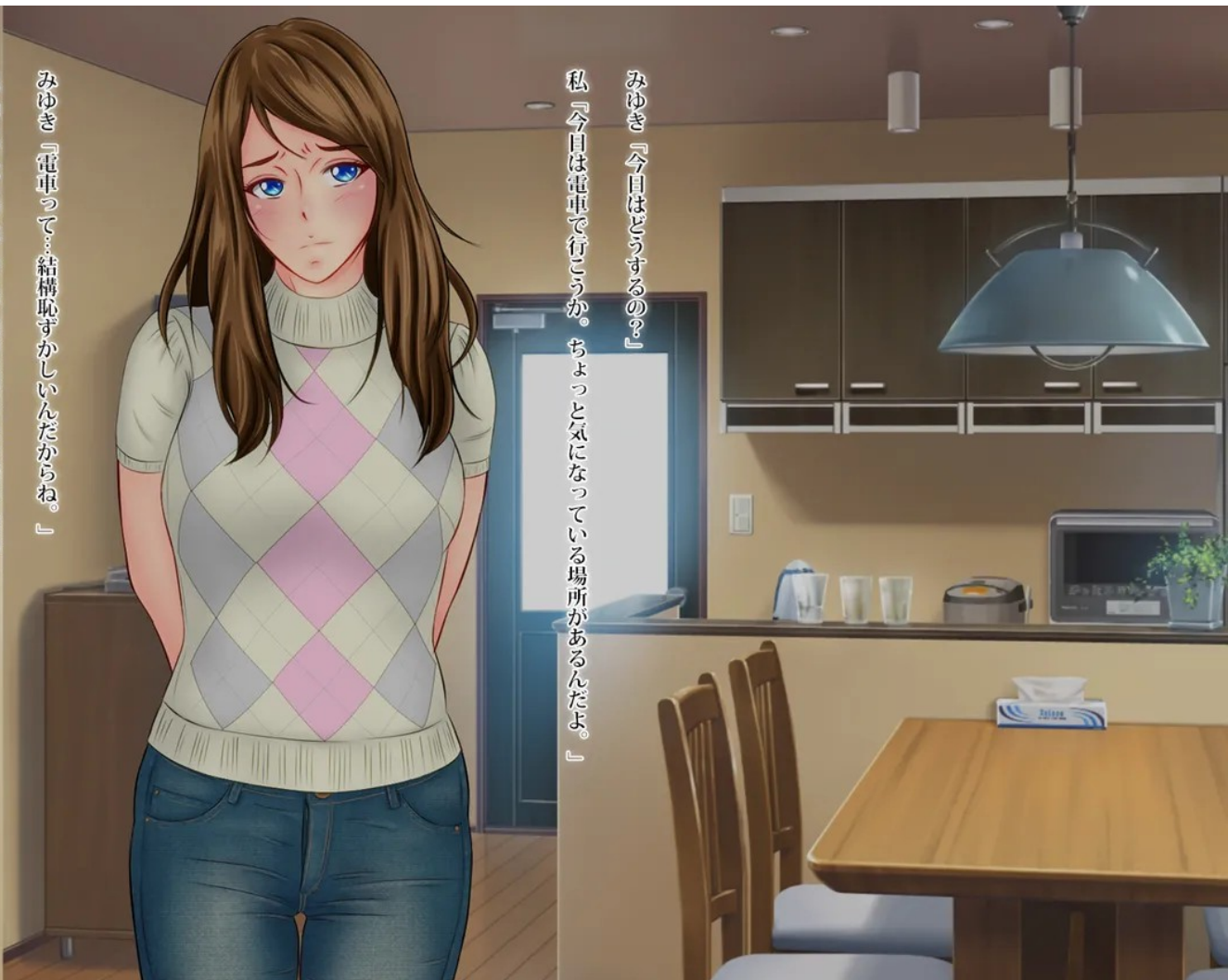
みゆき「電車って…結構恥ずかしいんだからね。」

私「ごめんごめん。でも、車では行けない所なんだ。」

みゆき「へー、今日はもう場所は決まってるんだ？」

私「ああ、何年か前に会社の慰安旅行で行った場所なんだけどね。」

みゆき「ふーん、そうなんだ。」



言えないけど、事後報告なら許してくれるんじゃないかと。



この恥ずかしそうな表情は、何度見てもいい。
時間はちょうど学生達の帰宅ラッシュだ。
きつと電車を埋め尽くしている周りの学生達は、何も気付いていない。
普通にしていれば、絶対に気付かれない。
それでも妻は顔を赤らめて恥ずかしがっている。
この服の下に競泳水着を着ているという事実が、彼女にとっては背徳的なようだ。
きつとこの恥ずかしさで、更にアソコを湿らせているんだろう。







今、妻がこんな水着を着ているなんて、知っているのは私だけだ。
時折私をさがすような目で見てくるのは、私に支配されているという感覚からだろう。
物事を被虐的に考えてしまうのは、Mの特性だ。

だからきつと、他人に犯されても濡らすんじゃないかと。

都合のいいように考え妄想を膨らませる私は、既にこの欲望を抑えることができなくなっていた。だから私は妻に内緒である計画を立てた。

それは、偶然を装って妻が犯されるように仕向ける作戦。

インターネットで「寝取り趣味」がある連中を探し、コンタクトを取った。

今向かっている場所は、すでに彼等と下見が済んでいる。
慰安旅行で行ったというのは、実は真っ赤な嘘だった。

みゆきはこの事実を知った時、私のことをどう思うのだろう。

もしかしたら、離婚になるかもしれない。

でも、一つだけわかってほしいのは、この計画はみゆきを愛しているからこそだということ。
私にとってこれは、愛情表現なのだ。





みゆき「凄く空気がキレイで、いい所だね。でも…本当に人が来ないの？」

私「ああ、ここは大丈夫。慰安旅行の時も、人が寄り付かない公園って言われてたから。」

それは連中から聞いたことだった。

この公園は裏山と繋がっており、その山の中には貸別荘がある。

強姦事件が多く、最近ではほとんど人が寄り付かなくなったそうだ。

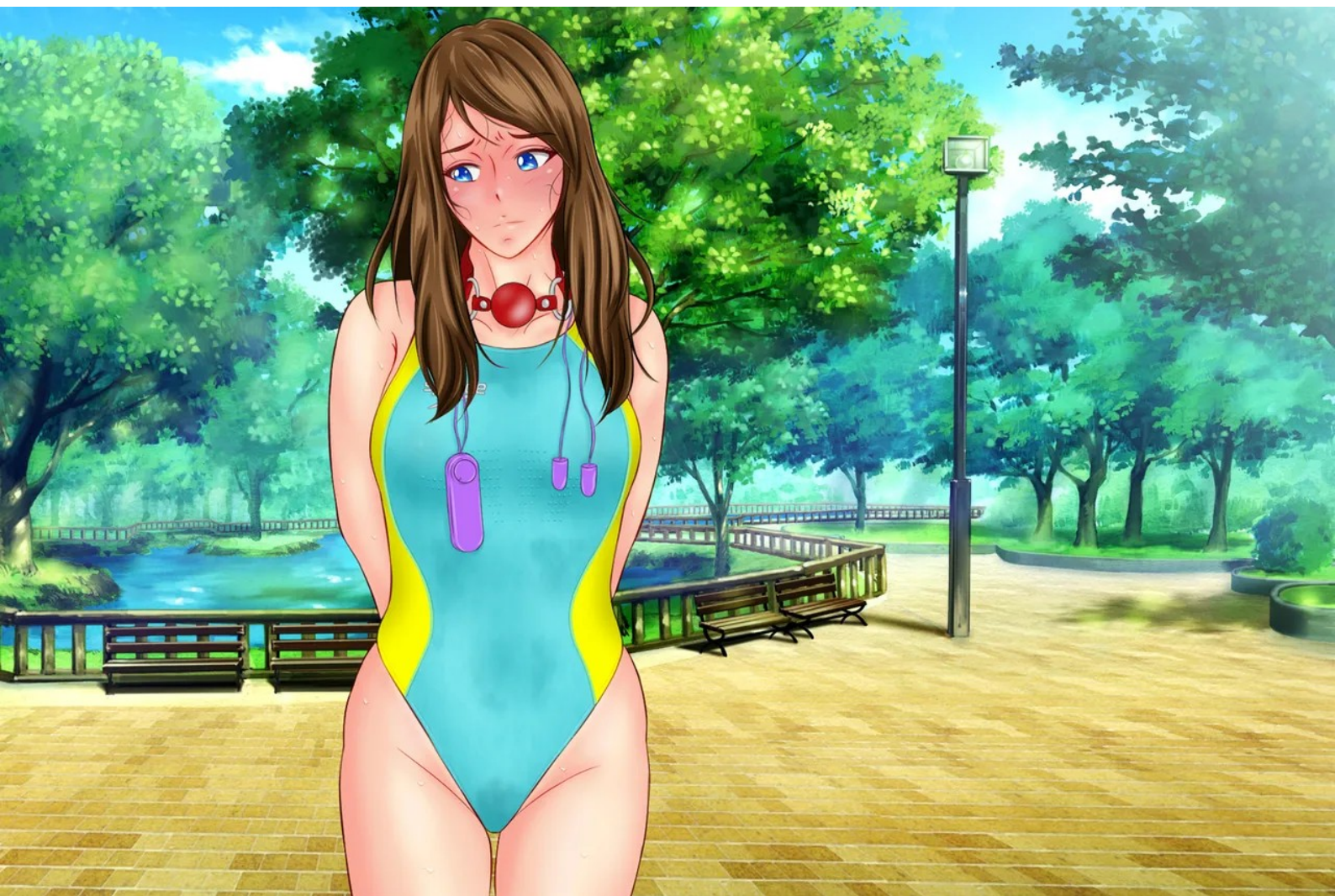
私「そろそろ撮影を始めようか、みゆき。」

みゆき「…うん。」

妻は周りを気にしながら、服を脱ぎ始めた。

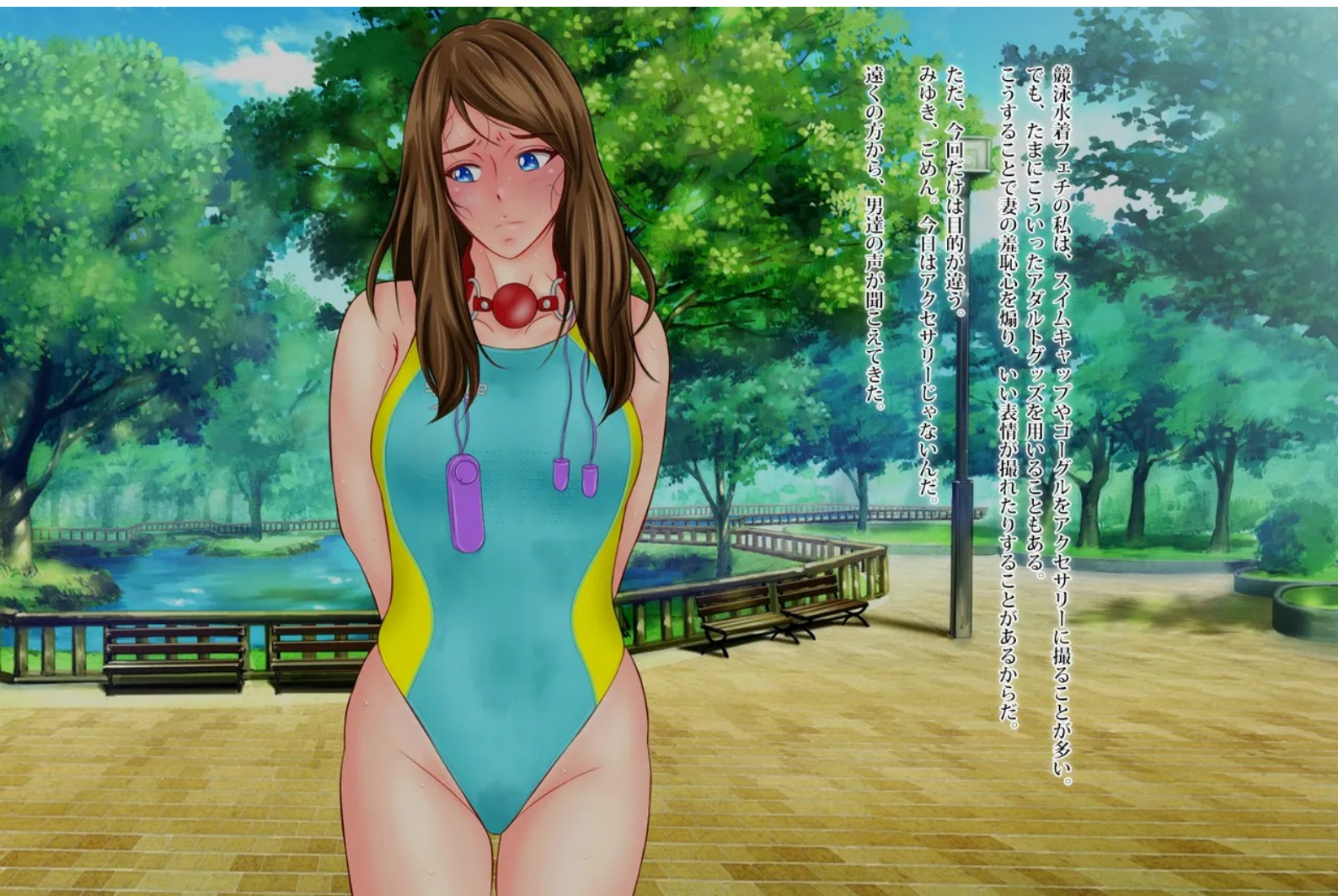
私「今日のアクセサリーはこれね。」

そう言っただけで私は妻にボールギャグとローターを手渡した。
ここまでは普段と変わらないから、妻も疑うことなく応じてくれる。



競泳水着フエチの私は、スイムキャップやゴーグルをアクセサリーに撮ることが多い。
でも、たまにこういったアダルトグッズを用いることもある。
こうすることで妻の羞恥心を煽り、いい表情が撮れたりすることがあるからだ。

ただ、今回だけは目的が違う。
みゆき、ごめん。今日はアクセサリーじゃないんだ。
遠くの方から、男達の声が聞こえてきた。



みゆき「えっ！？誰か来たんじゃないっ！？」

私「嘘だろ…みゆき、とりあえず裏山に逃げる！俺は機材片付けてからすぐ行くから！」

みゆき「えっ、機材なんか後でいいじゃん！」

私「よくないよ！見られたらマズいのはみゆきなんだから、早く逃げる！」

みゆき「わ、わかったわよ…早く来てね！」

みゆきはパツンパツンの競泳水着を着たまま、裏山の方へ走っていった。

いよいよだ。

私は彼等に約束通り拘束用のボンテージテープを手渡した。

私「頼んだよ。」

男達「ああ、こっちも楽しませてもらうよ。」

この時点で、私の股間は既にギンギンに勃起していた。



彼等は逃げる妻を追う。
私は少し距離を置いて、後ろから隠れるように彼等を追った。
手にはカメラではなく、ビデオカメラを持って。

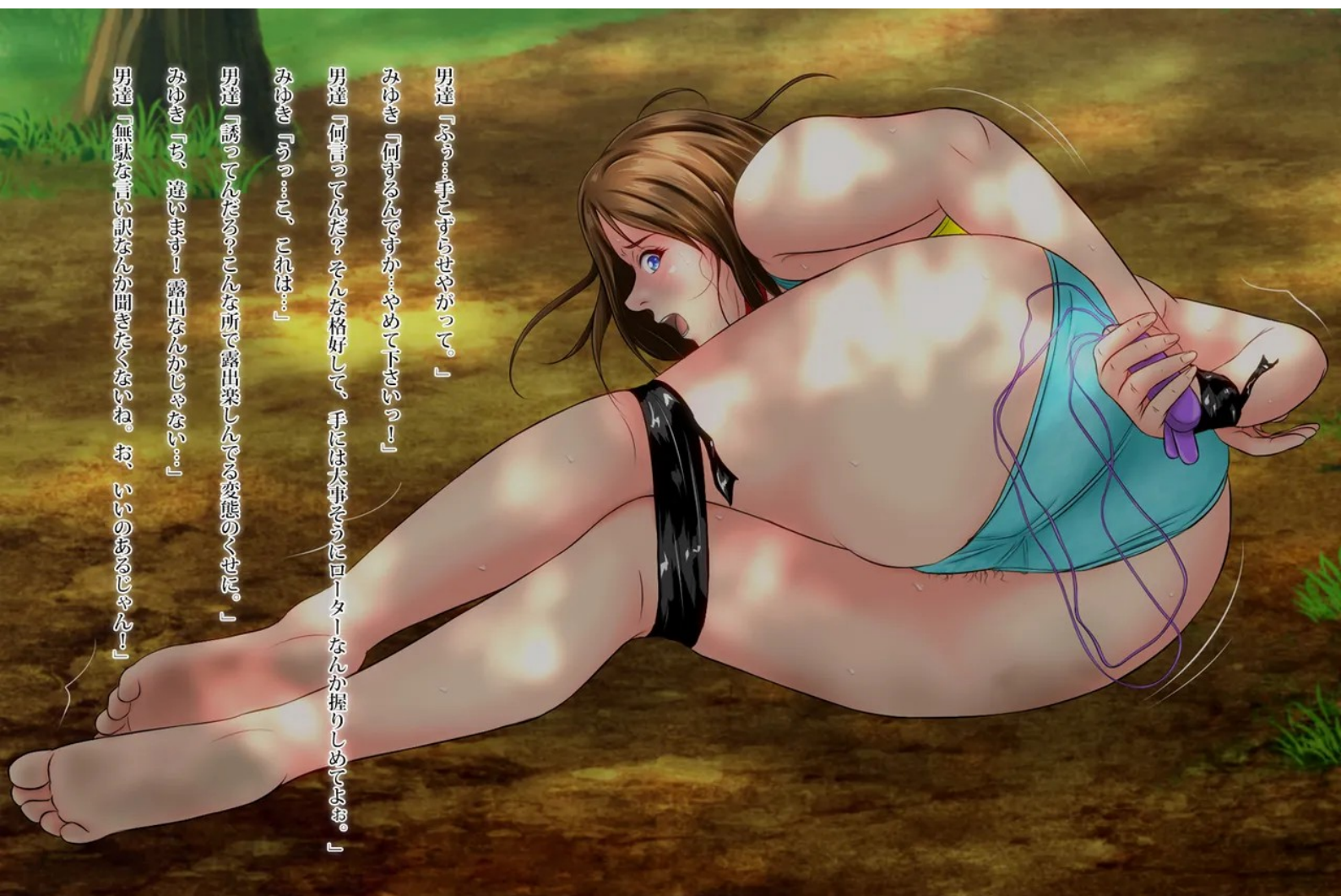
男達「奥さん、逃げても無駄だよ！」

見知らぬ男達に追われ、必死に逃げる妻。
手にはローターを握りしめ、首にはまるで首輪のように取り付けられたボールギャグ。
キツめの競泳水着は妻のデカイケツに容赦なく食い込んでいた。
みゆき、たまらないよ…。



みゆき「やめて、来ないで……いやあああつ!?!」





男達「ふう…手ですらせやがって。」

みゆき「何するんですか…やめて下さいっ!」

男達「何言ってるんだ? そんな格好して、手には大事そうにローターなんか握りしめてよお。」

みゆき「うっ…」これは…」

男達「誘ってたんだろう? こんな所で露出禁んでる変態のくせに。」

みゆき「ち、違います! 露出なんかじゃない…!」

男達「無駄な言い訳なんか聞きたくないね。お、いいのあるじゃん!」

彼等はボールギャグに気付き、その大きな玉を妻の小さな口に強引にはめ込んだ。



みゆき「んぐぅー……んん……」

男達「しばらく静かにしてろよ奥さん。ヒッヒッヒッ……」

みゆき「んぶっ……んんっ！」

くぐもった妻の声は、とても興奮する。
妻は今、どんな気持ちなのだろう。
回を寝がれた今、心の中で私の名前を叫んでいるのだろうか。
それとも、この状況に興奮しているのだろうか。

言うまでもなく、私は興奮している。

男達「おっと……そうだ。目隠しを忘れた。」







私が彼等に渡したボンテージテープは粘着性はなく、ラップのようなイメージだ。静電気によってテープ同士がくっつく為、肌には優しい作りになっている。これも妻への愛惜だ。

そして、これで手足を縛り、目隠しをするように指示をしたのも私だ。そうすれば、目隠しをしている間は近くにいられるから。間近で妻の犯されている姿を見たかった。愛しているから。

男達『奥さん、水筒が小さ過ぎてマン毛がはみ出してるぜ?』

みゆき『ンッ……んふっ……』

妻はどうすることもできない。ただ恥ずかしそうに、鼻から切なげな声を漏らすだけだった。

男達「折角だから、その大事そうに握っているローターで遊ぼうか？奥さん。」

みゆき「んん…っ!？」

彼等は妻の手からローターを取り上げ、競泳水着の股布を捲ると、二股に別れている片方をクリへ、もう片方をマ●コに当て、水着を戻した。

男達「絶対に止めたり弱くしたりするなよ。」

そう耳元で囁くと、妻の手にコントローラーを握らせる。





みゆき「んふっ……んふっ……んふっ……」

妻が悶え出した。

手足を縛られて身動きが取れず、視界と口を塞がれたまま、だらしなく涎を垂らして感じている。
やっぱりみゆきは、思った通りの変態下Mだ。

男達「おいおい奥さん、感じてんのかい？」

みゆき「んんうっ……んんうっ……んんうっ……んんうっ……」

必死に頭を振る妻。

そう、私は妻のこんな姿が見たかったんだ。
必死に抵抗しながら、嫌がりながら、それでも感じてしまう妻の姿を。

妻は思っているはずだ。

『感じてなんかない、やめて、もう許して。』
『どうして？気持ちよくなんかないのに……どうして濡れちゃうの？』

そんな被虐的なイメージで頭がいっぱいになり、イキ果てるのだ。

みゆき「んっ…んふうううううっ!!!!!!」





男達「あっはははは、すげーなこの奥さん。潮噴いてイッちゃったよ。」
みゆき「んっ……んぶっ……んっ……んぶっ……」
男達「さてと、じゃあ移動しますか。」

私は彼等に対し、静かに頷く。
片方の男が妻を抱え上げ、肩に乗せて運んでいく。

男達「あんまり暴れるとこのまま山の下に突き落とすぜ？」

みゆき「ンッ……んっ……」

そしてそのまま、今は使われていない貸別荘へと向かった。

……

……

……

予め下見は済ませてある。

私は計画通り、うまく隠れることができる所に身を潜めた。

目隠しばかりでは面白くないからだ。

男達「念の為言っておくけど、むやみに外に飛び出さない方が身の為だぜ。」

目隠しをされた状態で担がれてここまで来た妻は、帰り道などわかるはずもない。
彼等はそう釘を刺し、妻の拘束を解き、目隠しも外した。



男達「奥さん、髪の毛縛ってくれよ。」

妻はうつすらと目に涙を浮かべたまま、逃れようのない状況下で彼等の言いなりになっていく。
しっとりとした汗ばんだ体で腋を晒し、髪を束ねて結う妻の姿は、
今まで見てきた中で一番色っぽいと感じた。

男達はそんな私の気持ちを知らず、妻の腋に鼻を近づけていく。





男達「んはあああ…人妻の腋の匂い、たまんねえわ。」

みゆき「や、やめて下さいっ！」

妻は以前、腋を見られるのはとても恥ずかしいと言っていた。
旦那の私ですら恥ずかしいのに、今は見ず知らずの男に間近で見られ、更に匂いまで嗅がれている。
妻の顔は見る見る赤くなっていった。

男達「ところで奥さんはどうして競泳水着なんか着てるんだい？」

みゆき「旦那の…趣味です。」

男達「奥さんの体型には随分と不釣り合いだな、はっはっはっ！」

みゆき「うっ…んっ…恥ずかしいっ…」

男達「奥さん、自己紹介してくれよ。名前、年齢、スリーサイズくらいは言えるだろ。」

みゆき「そ、そんな…イヤです、言えません。」

男達「いいから言えよ。言わないとこっちと酷い目に遭うぜ。」

みゆき「……齋藤みゆき…三十四歳…スリーサイズは…許して下さいっ…」

妻は自分のぼっちゃり体型を気にしている。

そんな恥ずかしい質問をされて困っているみゆき…とても可愛いよ。



男達「わかったよ。じゃあ、そこにうつ伏せで横になって。」

みゆき「……はい。」

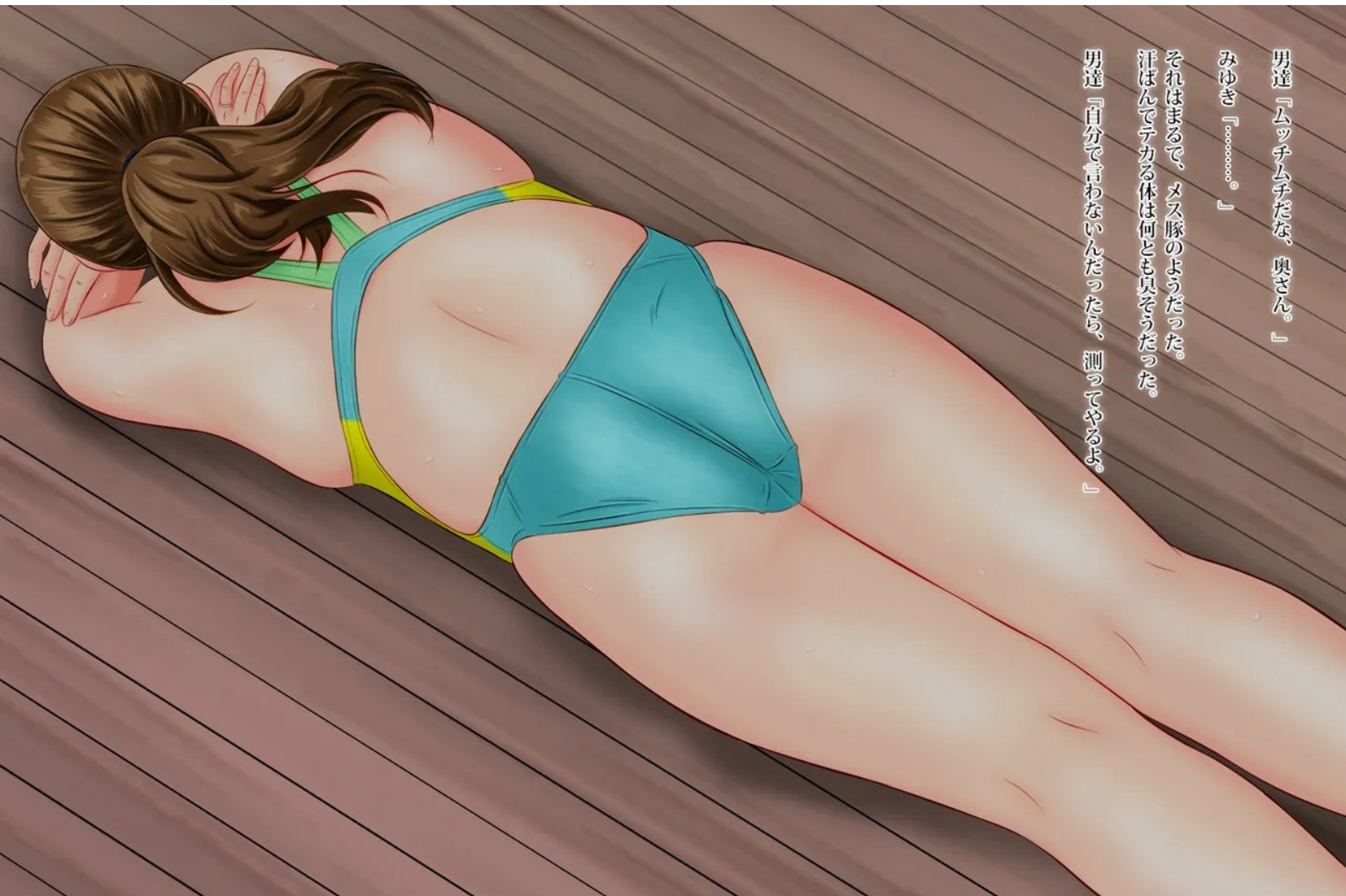


男達「ムッチムチだな、奥さん。」

みゆき「……………」

それはまるで、メス豚のようだった。
汗ばんでデカる体は何とも臭そうだった。

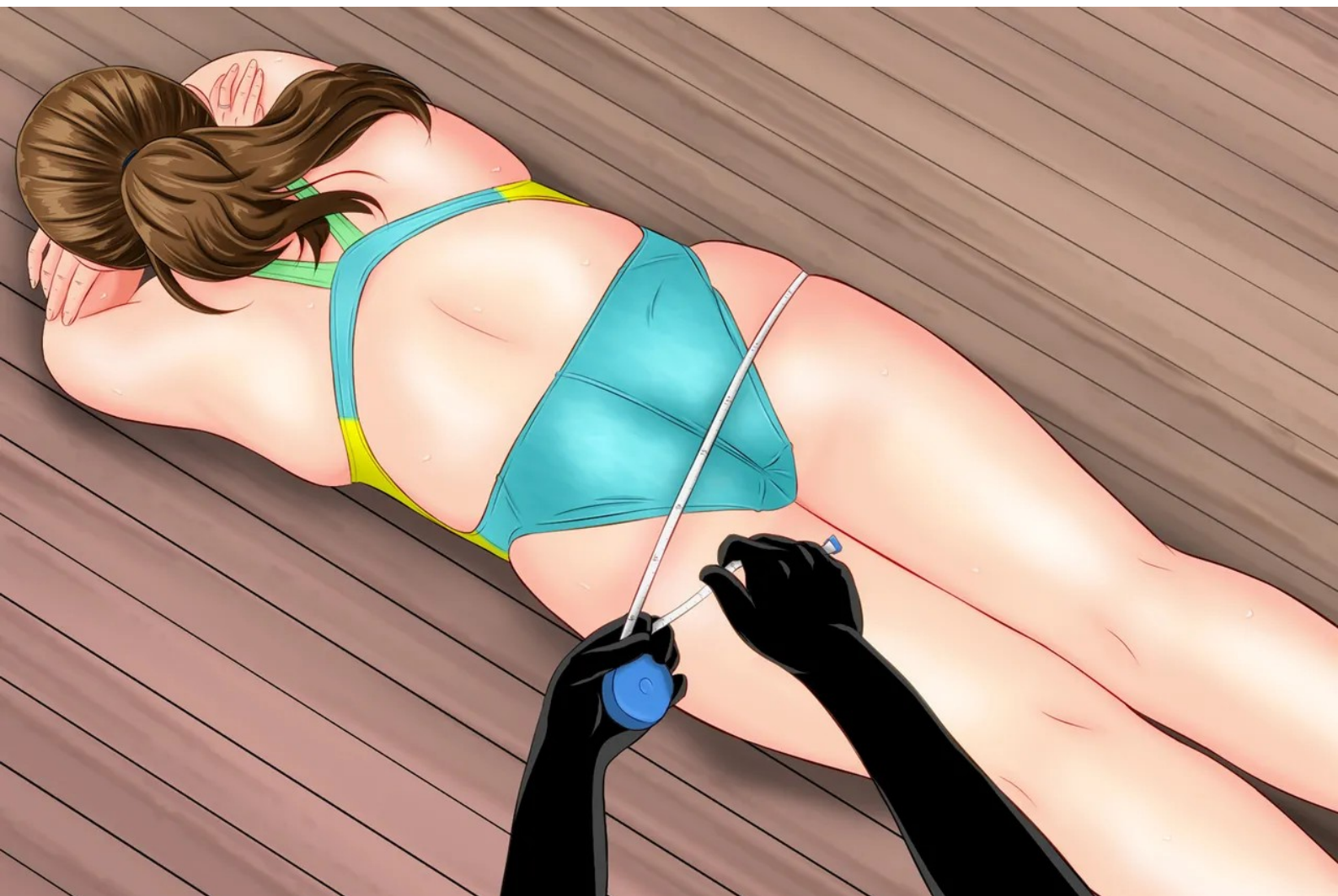
男達「自分で言わないんだったら、測ってやるよ。」



みゆき「ちょ、ちょっと、何してるんですか！？やめて下さい！」

男達「うるせー！じっとしてろー！」

みゆき「うつ…うつ…」

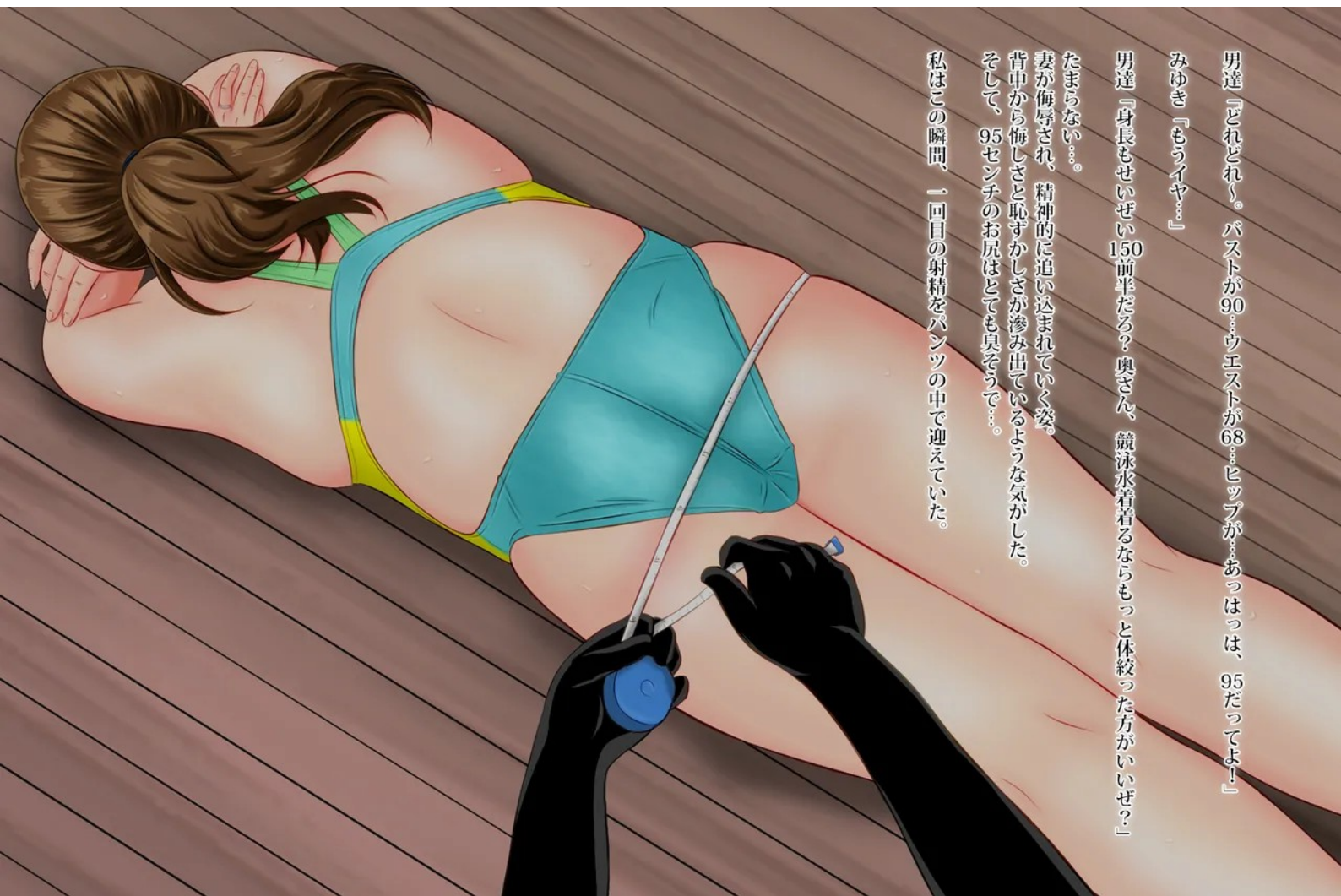


男達「どれどれ。バストが90…ウエストが68…ヒップが…あっはっは、95だってよ！」
みゆき「もうイヤ…」

男達「身長もせいぜい150前半だろ？奥さん、競泳水着着るならもっと体絞った方がいいぜ？」
たまらない…。

妻が侮辱され、精神的に追い込まれていく姿。
背中から悔しさと恥ずかしさが滲み出ているような気がした。
そして、95センチのお尻はとても臭そうで…。

私はこの瞬間、一回目の射精をパンツの中で迎えていた。



男達「奥さん、測定の結果、ケツがデカ過ぎるから罰ゲームだな。」

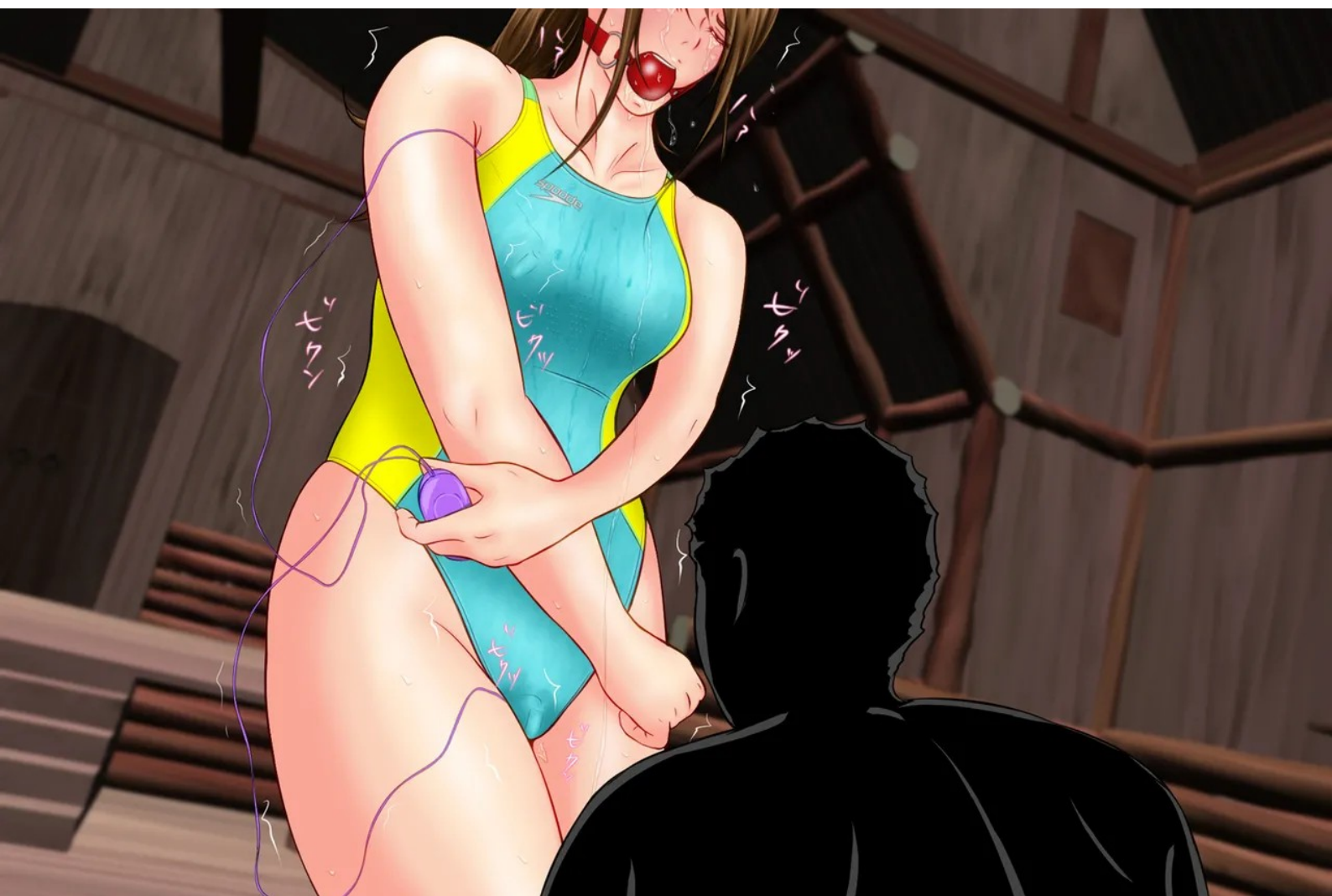
みゆき「うつ……罰ゲームって、一体何をするんですか…」

男達「大したことじゃないよ。奥さんの大好きなローターを当てるだけさ。」

みゆき「そんな…もうイヤです……許して下さい!」

男達「残念ながら奥さんに拒否権はないんだよ。」

彼等はまたしても妻の口にボールギャグを押し込むと、ローターを競泳水着の中に滑り込ませた。



みゆき「んふっ……んがっ……んはあ……んんうっ!!」

妻は涙と涎でグショグショになりながら、ローターの刺激に耐えているようだった。今度はクリと乳首に当てられている。子供を産んでから妻の乳首は肥大化し、敏感になった。そんな乳首とクリの同時責めは、かなり効果的だと言える。そして、そのコントローラー部分を自分で持たされているのが何とも哀れで愛おしい。

男達「あっはっはっ! 涙流して喜んでもよ、この奥さん!」

みゆき「かはっ……んっ……んふっ……んふっ……」

男達「おいおい、ドンドン染みが大きくなっていくぜ。メスの匂いもワンプン…」

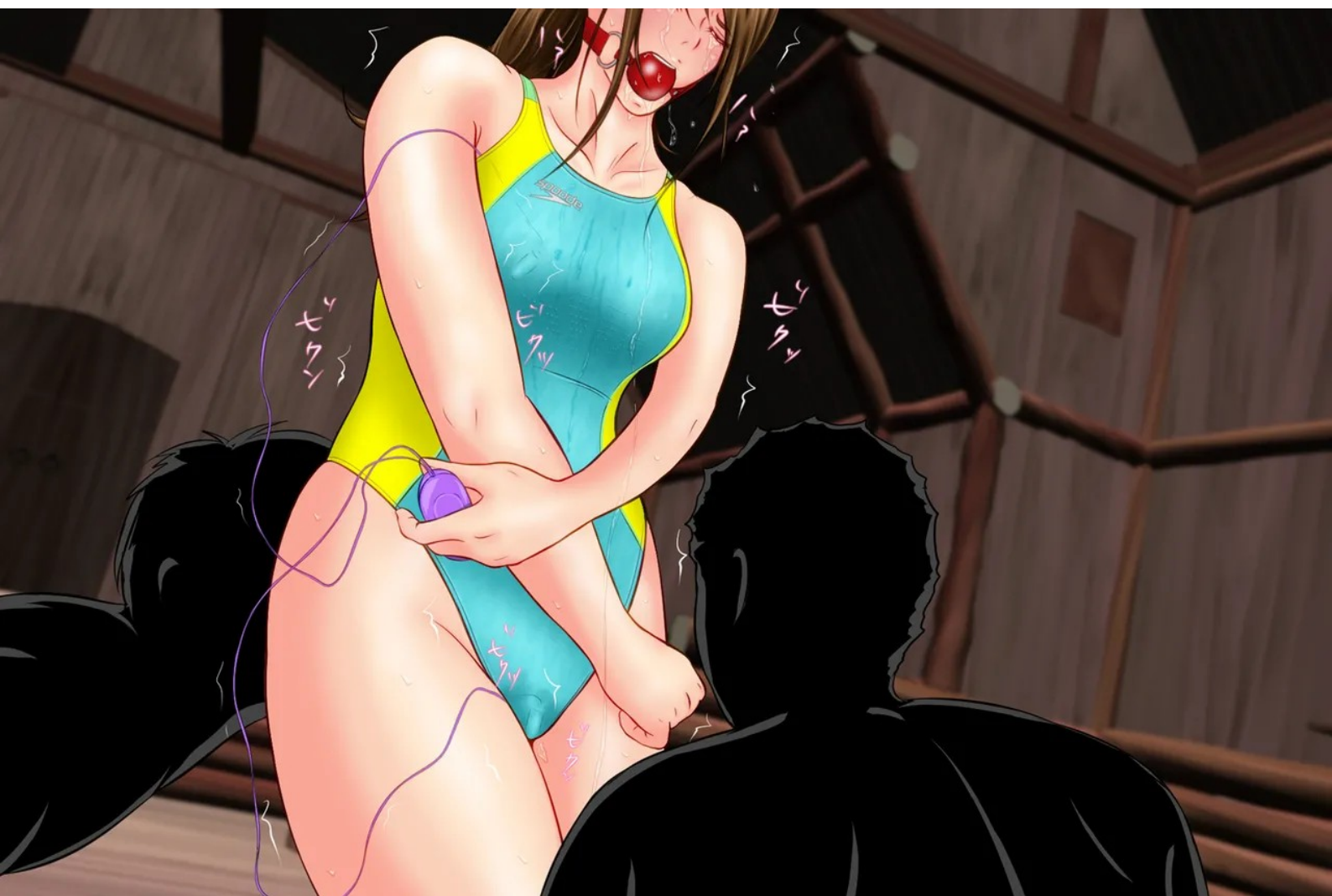
みゆき「シフー、シッ……んはあ……かはあ……」

彼等を選んで正解だった。責め方が私のツボをついている。そう、痒い所に手が届くような、見ていてとても気持ちのいい責めだった。



男達「ケツも臭そうだな…どれどれ。」

みゆき「んんうっ!？」



男達「くはっ、たまんねえ！競泳水着に汗が染み込んだ匂い…ムレムレだな奥さん。」

妻は汗っかきで、匂いのことは随分気にしている。

だから私はあるて家から競泳水着を着させて、妻から放出される匂いも染しんでいるのだ。

あの匂いを、今は見ず知らずの男達に嗅ぎ回らされている。

妻にとって、これがどれほどの恥辱か…私にはよくわかるのだ。

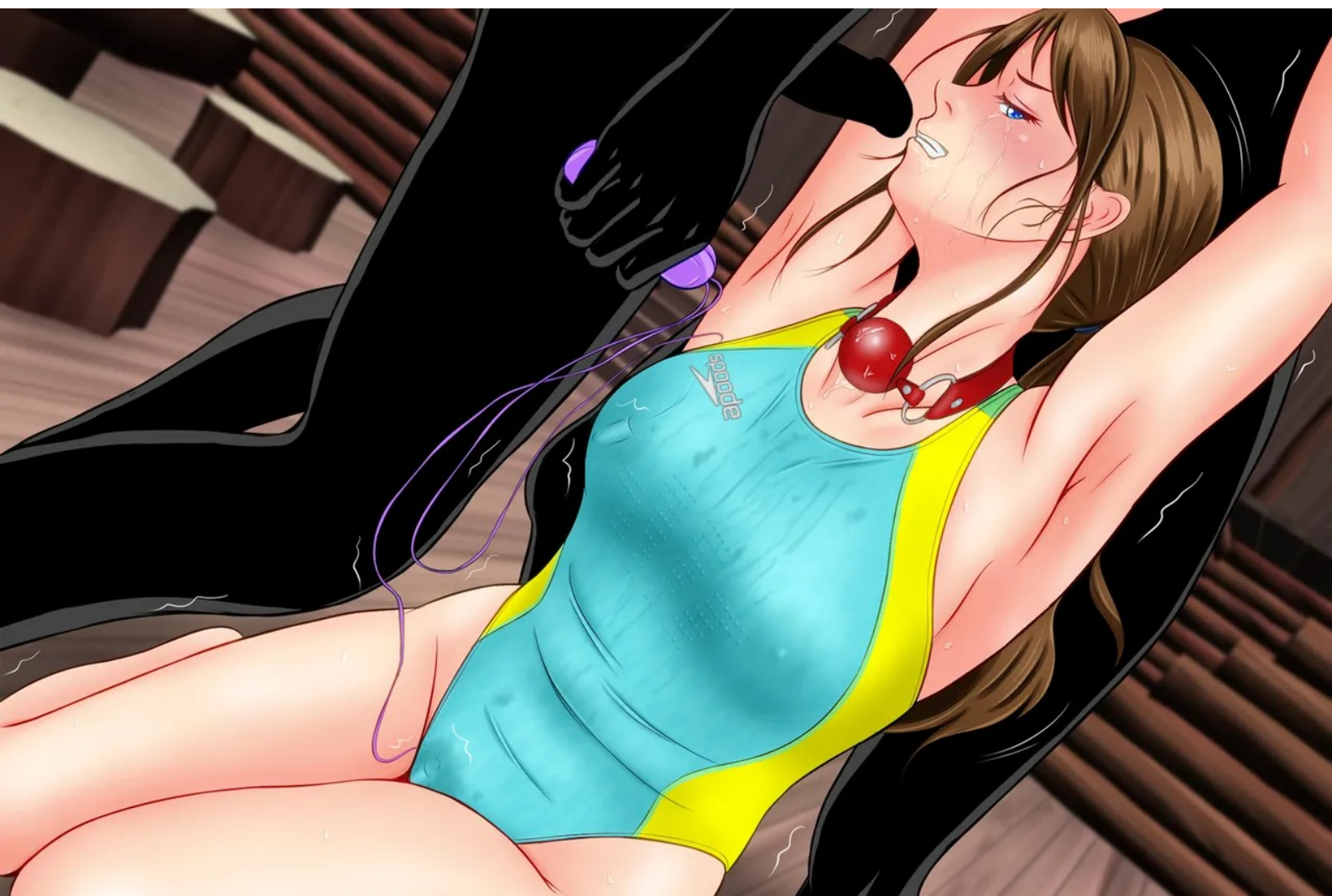
みゆき「んんっ…んちゅっ…グスッ…んちゅっ…グスッ…」

男達「んちゅっした奥さんやおいおい、まだかまたイッたのか？」



すると彼等が遂に動き出した。

男達「ああ、もうガマンできねえわ。自分ばっか気持ちよくなってんじゃねーよ、エロ妻が！」
私は固唾を飲んでその状況を見守っていた。





男達「ほら、しゃぶれよ、毎晩旦那のチンポもしゃぶってんだろ？」

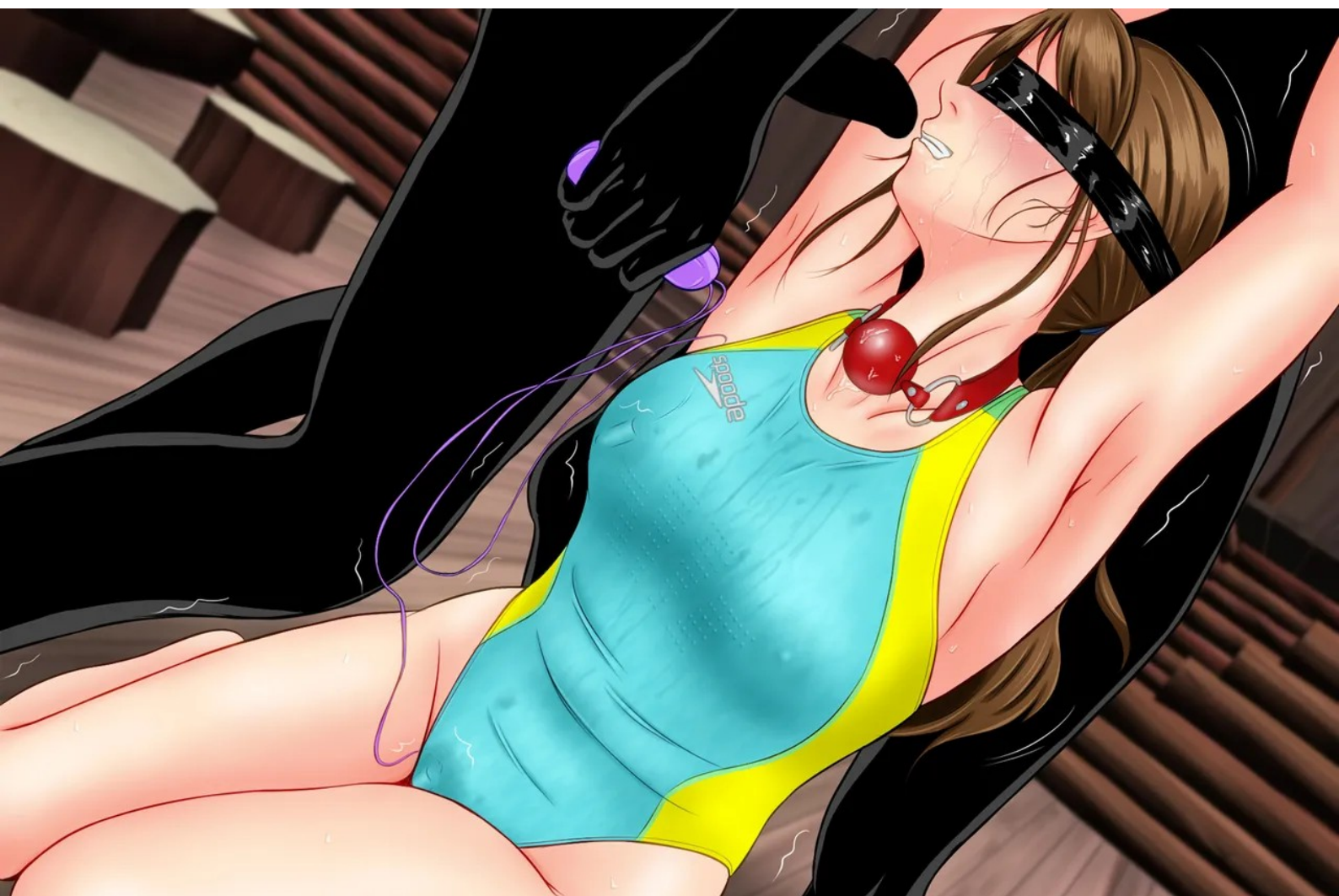
みゆき「……………」

妻は目を逸らし、頑なに口を噤む。
鼻先につきそうな程の至近距離に、他人の肉棒が突き立てられている。
あの優しい唇で、他人の肉棒をしゃぶるのだろうか。

……………みゆき早く啜えなよ。

男達「恥ずかしくて旦那以外のチンポは見れないってか？ だっただらこつしてやるよ。」

彼等は先程のボンデーテープで妻の視界を再び奪った。
そして、私の方に合図を送る。
彼等の肉棒をフェラする妻の姿を、間近で見せてくれるらしい。
頼もしい連中だ。



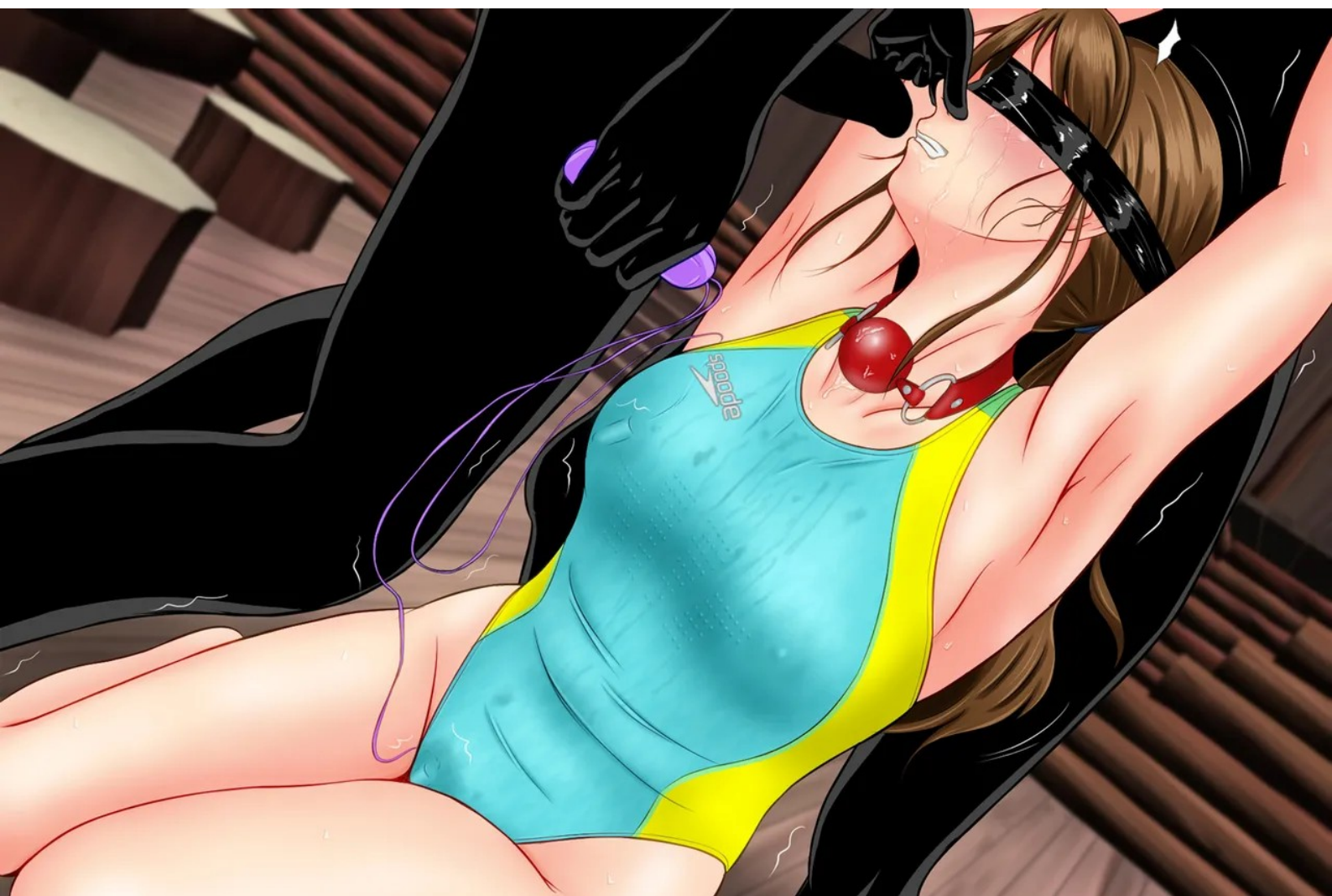


男達「これなら恥ずかしくなりたいな。おらねえやろよ。」

みゆき「イヤです...旦那以外のモノなんて、口にしたくなら...」

みゆき

男達「はっはっはっ、可愛い奥さんだな。でも、そんなの通用しないんだよ。」





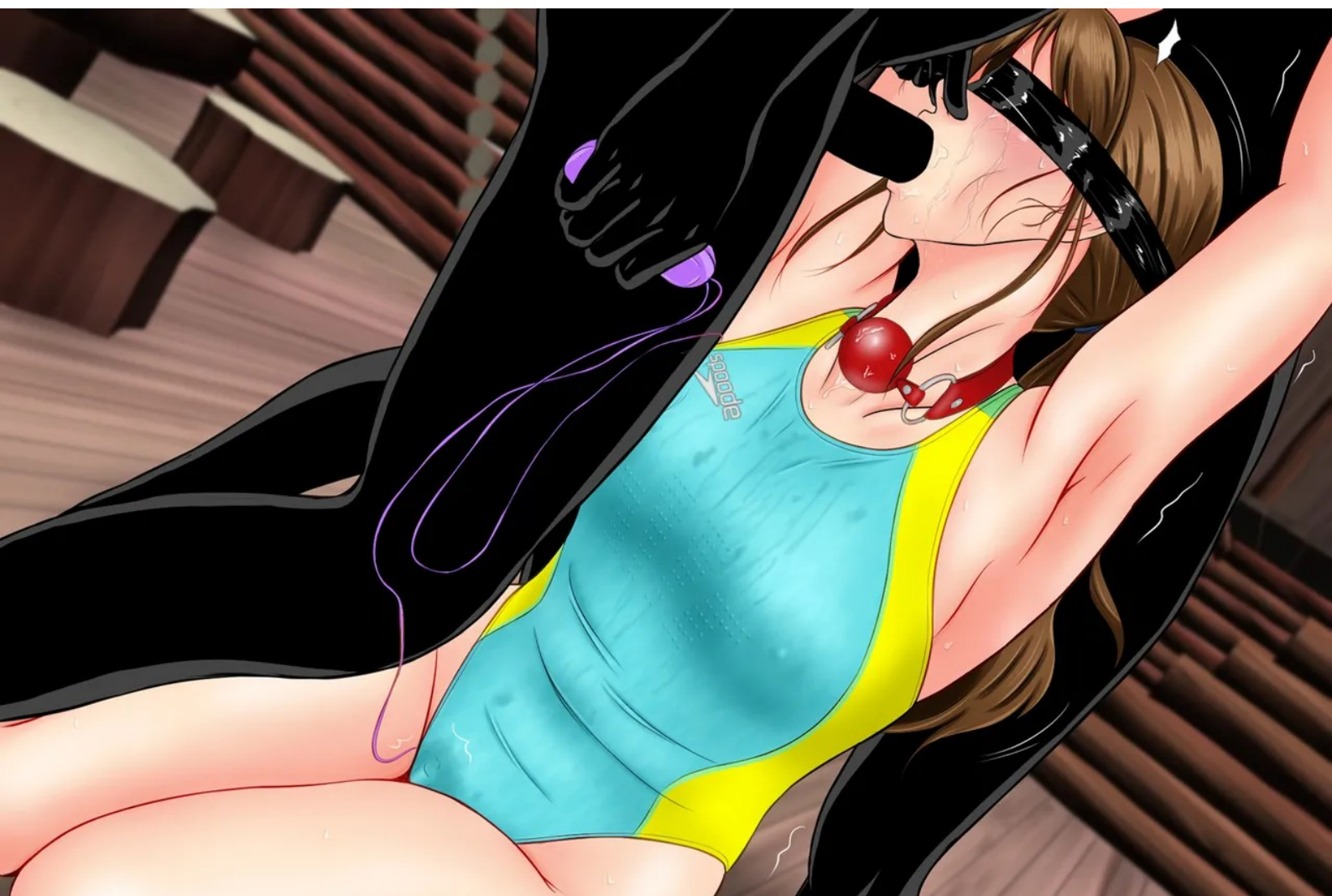
みゆき「んちうっ……」

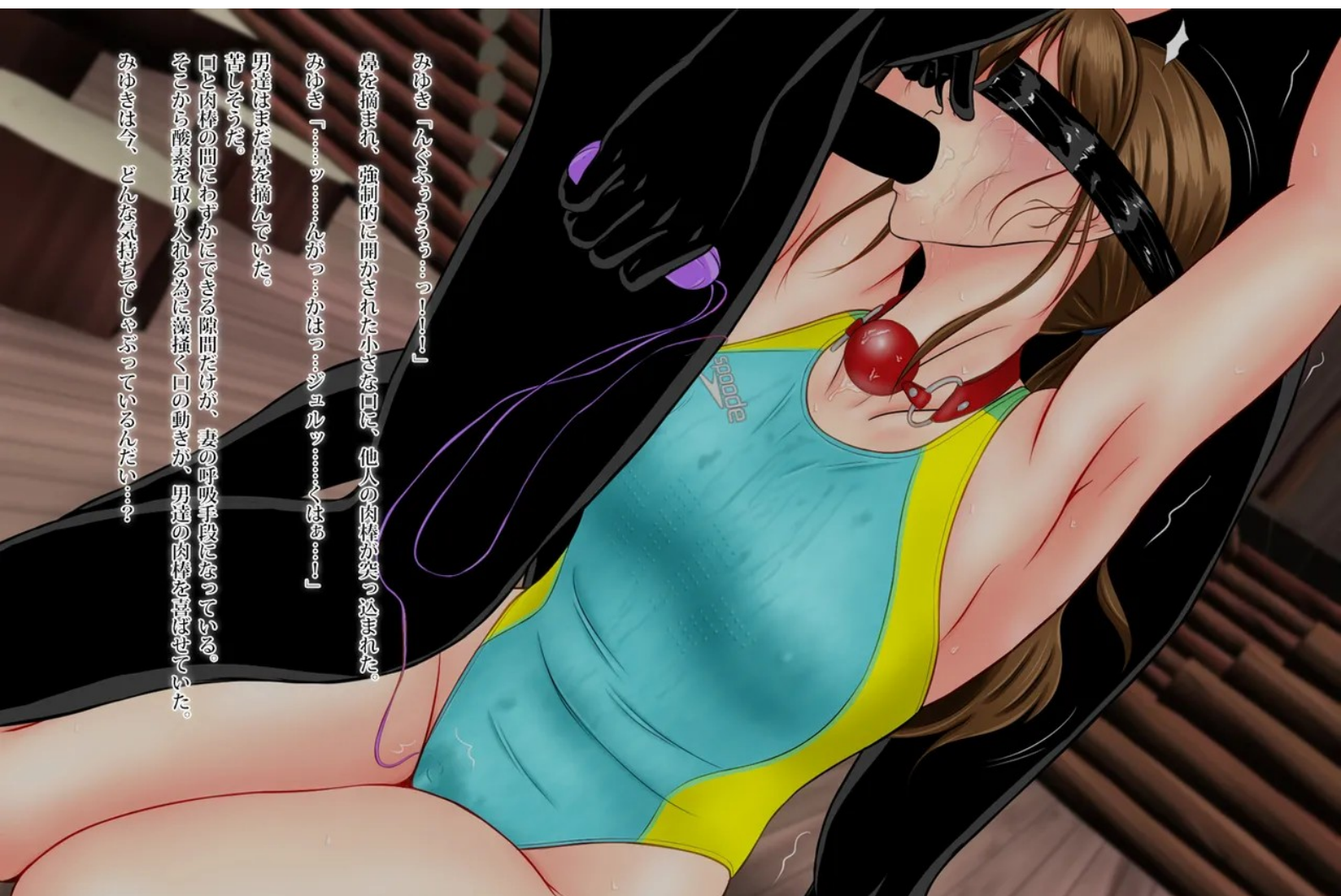
男達「一回も勝手にイッたくせに、よくそんなことが言えるなあ。好きなんだろ？奥さん。」

いいんだよ。みゆき……

俺はみゆきが他人の肉棒を無理矢理しゃぶらされている所を見たいんだ。

みゆき「んんん……ン……おはち……」





みゆき「んぐふうちうちう……っ！！！！」

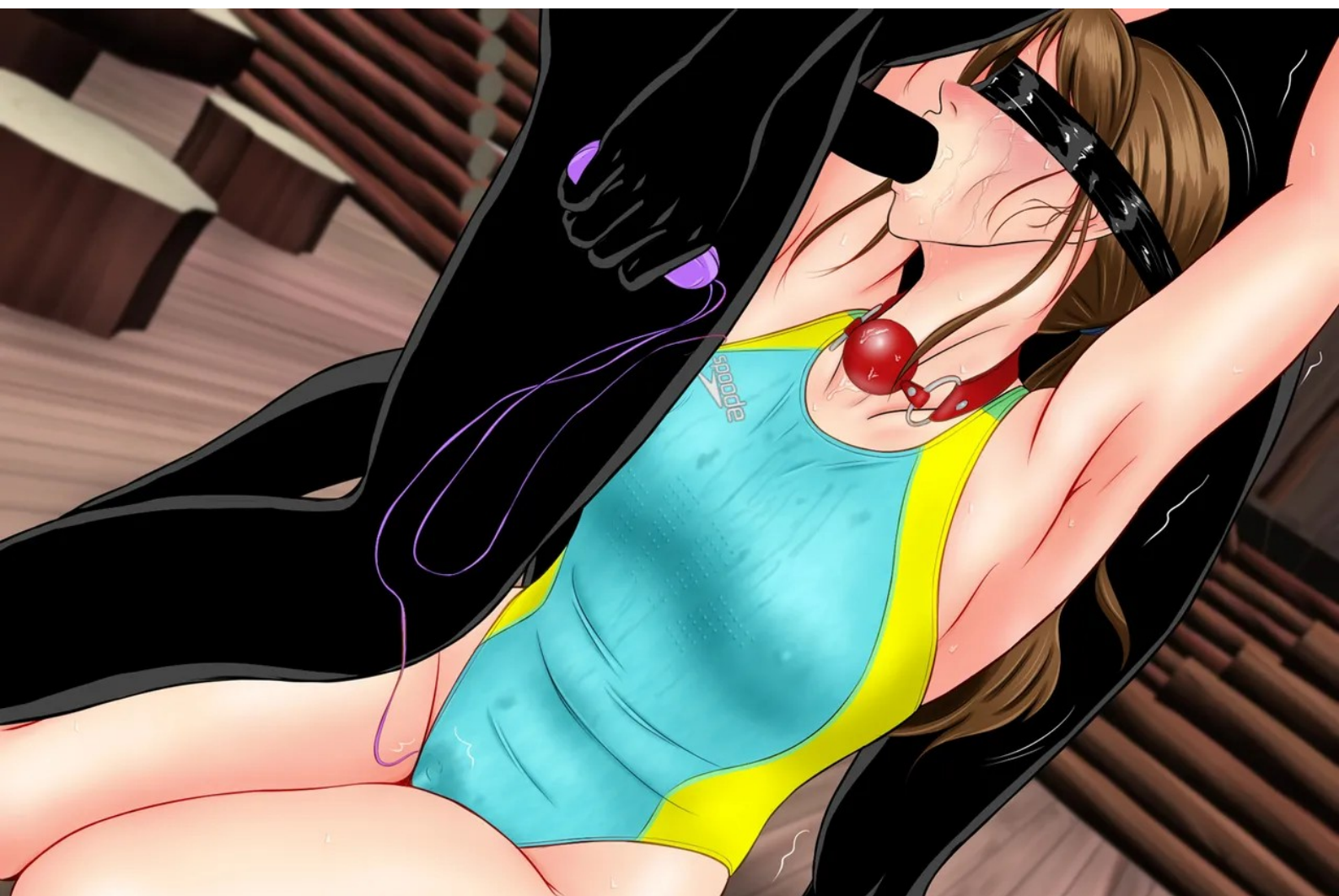
鼻を摘まれ、強制的に開かされた小さな口に、他人の肉棒が突っ込まれた。

みゆき「……………んがっ……かはっ……ジュルッ……………んはぁ……」

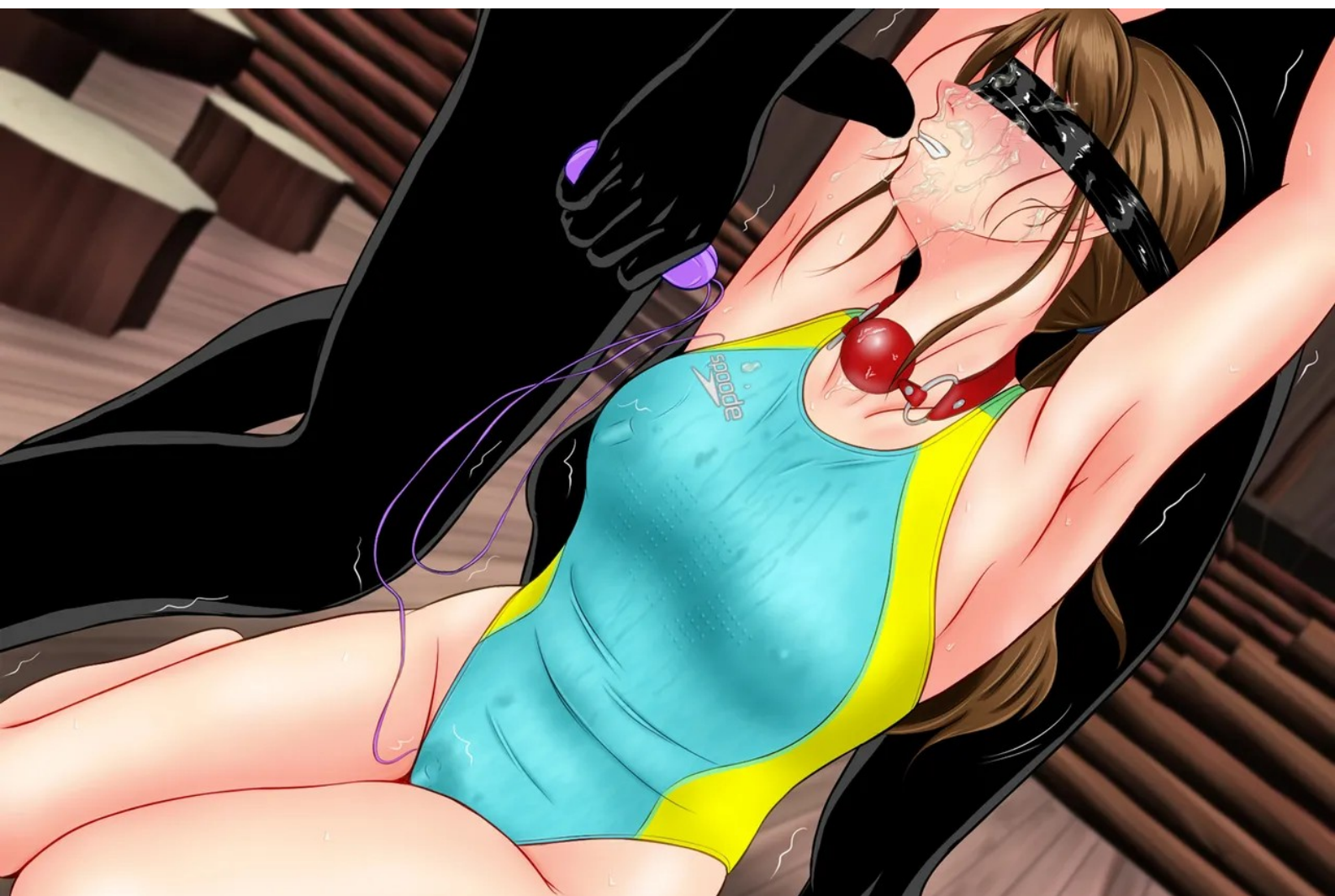
男達はまた鼻を摘んでいた。
苦しそうだ。

口と肉棒の間にわずかにできる隙間だけが、妻の呼吸手段になっている。
そこから酸素を取り入れる為に激しく口の動きが、男達の肉棒を喜ばせていた。

みゆきは今、どんな気持ちでしゃぶっているんだい……？



男達「ああ…奥さんのフェラ最高だよ。イキそうだ…その可愛い顔にぶっかけてやるよ。」



みゆき「も、もうやめて下さい…お願い、それだけは……い、いやあああああ……!!」



男達「ああ、イク…ッ！！！」





みゆき「……ンッ……ハア……ハア……んはぁ……グスン……ンッ……んぐう……」

男達「さすがデカケツだな。全部こぼさずには受け止めてるよ。」

みゆき「……ぐう……帰して下さる……」

男達「旦那がそのうち迎えに来るたる。それまでは下手にここから動かない方がいいぜ？」

みゆき…もう少しだけ………楽しませてくれ。
私は心でそう呟き、もう一度身を隠した。

みゆき「ちょ、ちよつと…もうやめて下さい……イヤ、やめて…っ!」



1

!

15

1



そう言って、彼等は妻の視界までも奪っていった。



変態露出人妻
精液かけ放題!!

みゆき「ンンッ!? ンッ…んぶうっ!」

彼等は私に目配せしながら、その場から立ち去っていった。

みゆき「んぷっ……ンッ……んうー！……んぷっ……ンッ……！」

静まり返った部屋に、妻の呻き声が悲しく響き渡る。

どれだけ藻掻いても、拘束は解けない。

絶え間なく与え続けられるローターの刺激に、体をビクつかせて反応する妻。きつとまた何度もイッてしまうのだろう。

私はそんな妻の姿に、
 またも勃起させられていた。



すると、ゲラゲラ笑いながら近付いて来る男達の声が聞こえてきた。
どうやら最初の客が来たようだ。

...

.....

.....

男達「うわっ、マジかよ！すげーなこれ！」

男達「なんかこの人妻、汗臭いな。」

男達「気にすんなよ、どうせザーメンまみれになってもっと臭くなるんだから。」

男達「だな、あはははは！」





変態心露出人妻
精液かけ放題!!

みゆき「んふっ……んっ……んはぁ……んっ……んふっ……んっ……」

男達「俺、この声だけで何度でもイけるわー!」

男達「感じてるよな、この人。」

みゆき「……んっ……んふっ……」

その後も数人の男が妻の姿をオカズにし、精液をかけていった。
私も我慢ができず、他人のフリをして三度目の射精を妻にかけた。



変態露出人妻
精液かけ放題!!



愛してるよ みゆき。

変態露出人妻
精液かけ放題!!



競水人妻寝取られハンティング

完

企画・制作

二次元スタジオ BLACK★BASE